

まえがき

アウトプット型の授業とは

公民の授業では、生徒たちに自分の感想をまとめさせるアウトプット型の授業をおこなっている。

ここに言うアウトプット型の授業とは、数時間単位の単元で構成し、最後に単元で扱ったテーマについて感想をまとめさせ、それを生徒どうしで共有するとともに、生徒の家庭やテーマにかかわる方々に伝え、さらには新聞などのメディアに発信し、生徒と社会との対話を生みだそうとする授業である。

生徒は友だちの考えからも学ぶ

「臓器移植」や「死刑制度」、「国際貢献」などのアウトプット型の授業で取り上げる教材は、生徒たちにとって「切実」なものである。教材そのものに考えるに値するパワーがあるため、生徒たちは教材に引き込まれ、深く考えることができる。ただ、生徒たちの深い学びが可能となるのは、こうしたパンチの効いた教材からだけではない。教室の中には、自分とは異なる考え方をした友だちが存在する。こうした友だちの考え方にふれることで、生徒たちは自分の考えを再構築できる。友だちの考え方にふれようとした時、学級全体場で意見を表明する場面も当然あるが、グループ学習の方がより表明しやすい。グループでの話し合いを活性化させるためには、生徒たちがそれぞれの考えを持って話し合いに参加することが望ましい。

しかし、自分の考えをまとめられなかったり、発言によって表明できにくかったりする生徒たちも少なくない。そこでよく利用するのが付箋紙である。あらかじめ付箋紙に自分の考えをまとめておき、それを持ち寄ることで、グループでの話し合いのハードルはずいぶん低くなるはずである。持ち寄った付箋紙をKJ法でグルーピングしてもおもしろいし、ここでの話し合いを学級全体に広げ、共有することも可能だ。以前「死刑制度」の学習の中で、その存廃について扱った時、「えん罪の危険」を指摘する生徒がいた。この指摘に、グループ学習の中で、別の生徒が「あり得ない。あったら世紀の大事件。」と付箋紙に記した。この付箋紙を学級全体で共有した上で、えん罪で死刑囚とされた斎藤幸夫さんの姿を紹介した。教室で学ぶ意味は、まさにここにある。すなわち、生徒たちは教材からも深く学ぶことができるが、グループ活動なども通して、教室の中にいる自分とは異なる考え方をした友だちからも学ぶのである。

感想を共有し家庭にも届ける

アウトプット型の授業でまとめた感想は、その多くが中学生らしい感性にあふれ、ハッとさせられることがよくある。こうした感想を私が独り占めするだけではもったいないので、いつの頃からか生徒たちと共有するようになった。

1学年1学級という小規模校での勤務が多かったため、3年生担任の場合は学級通信に、担任でなかった場合は社会科通信などに、生徒たちの感想を掲載して発行していた。終礼時に配布される学級通信を、食い入るように読んでいる生徒たちの姿が忘れられない。自分の感想とともに、友だちの感想を読み込むことで、さらに自分の考えを深めていることだろう。

学級通信の場合は、生徒の手を通して家庭にも届く。2017年3月、2年間担任した生徒たちの卒業式の後、「生徒たちはよく考えていますね。」「学級通信がおもしろかったです。」「学級通信のことを職場の朝礼でスピーチしました。」など、複数の保護者から声をかけていただいた。家庭も巻き込んだアウトプット型の授業は、こうした反応も多くて楽しい。

感想を関係する方々やメディアにも届ける

ただ、これだけでは飽き足らず、教材に関係する方々にも学級通信を送付し、生徒たちの学びを紹介するようになった。2006年度、「死刑制度」について学んだ生徒たちの感想を学級通信にまとめたが、これを島根県内の法曹3者の代表である松江地方裁判所長、松江地方検察庁検事正、島根県弁護士会長にそれぞれ送付した。これら法曹3者の代表からは、後日返信があり、この返信を再度学級通信に掲載し、発行することで、さらに学びを深めることができた。

翌2007年度は、光市母子殺害事件の被害者遺族で、全国犯罪被害者の会（当時）で幹事を務めた本村洋さんからメールをいただいた他、死刑廃止を推進す

学 級 通 信（六日市中学校3年部）

サ ク ラ サ ク

～2017 年春、満開のサクラのもとで卒業しよう～

第38号
2016. 12. 05

社会科「LGBT（1）」

社会科における公民的分野では、日本国憲法について学習します。とりわけ三大原理の一つである「基本的人権の尊重」については時間をかけて扱いますが、平等権の中ではじめてLGBTについて取り上げました。LGBTというのは性的少数者のことで、その名称はL（レズビアン：女性の同性愛者）、G（ゲイ：男性の同性愛者）、B（バイセクシュアル：両性愛者）、T（トランスジェンダー：「体の性」と「心の性」が一致しない人など）に由来します。日本におけるLGBTの割合は13人に1人とのデータがありますが、学校や社会の中での理解はなかなか進んでいないのが現状です。



なぜ多くの人がLGBTの人を否定するのだろうかと思います。なぜなら、誰かを愛して「結婚したい」と思うかどうかは、その人の自由だと思うからです。この社会はLGBTのことを、きちんと理解しているのでしょうか。僕はLGBTについて、テレビのニュースやインターネットなど、うわべだけの情報を得ているだけで、そこまでちゃんと理解できていません。中途半端な理解で何かを責めるわけではありませんが、LGBTの人が悲しまないような社会をつくっていくことが、大人たちやこれから大人になっていく僕たちに求められていると思います。そしてそういう社会をつくることは、これから生まれてくる子どもたちに贈ることができる、大きな幸せだと僕は思いました。

性的少数者について考えた時、どこまでが差別なのかということに悩みました。もし私の身近な人の中に性的少数者がいたら、私はきっと驚いてしまうだろうと思います。もしかしたら、私が驚いたことで、その方が傷ついてしまうこともあるかもしれません。また最近では、性的少数者がテレビなどに出演し、活躍している姿も多くみられるようになりました。これは社会に認められてきていると、とらえられるかもしれませんが、しかし私は、その芸能人が性的少数者であるから人気が出ているということであれば、それはその性に対する差別にあたるような気がして、なんだか納得いきません。アメリカのドラマなどを見てみると、同性愛を扱ったような内容も多くあるし、同性愛者同士のキスシーンを見たこともあります。一方、日本でこのような内容のドラマを見ることは、ほとんどありません。これが日本と海外との認識の違いなのかなと思いました。

「アウトプットする公民の授業」イメージ図

【教材研究】

アウトプットを念頭に資料を準備し、授業の展開を検討する。



【実際の授業】

—インプット型—

一般的には、1時間単位の講義型授業である。生徒が自分の考えをアウトプットする場面もある。

—アウトプット型—

数時間単位の単元で構成し、最後に生徒に感想をまとめさせる。アウトプットするためには、インプットする場面もたくさんある。



—生徒どうしが学びあえる学習形態—

生徒は教材や教師からだけでなく、グループ活動などを通して、自分とは異なる考え方をした友だちからも学んでいる。



【授業後の取り組み】

—アウトプット—

生徒の感想を、学級通信に掲載し、家庭や教材に関係する方々に送付する。読んだ方から返信されることもあり、これを再度学級通信に掲載する。さらに生徒の感想を新聞の投稿欄などに送付すると読者から反響があることも少なくない。



—インプット—

生徒の感想を読んだ保護者や教材に関係する方々、新聞の読者などの返信から、生徒はさらに自分の考えを深めることができる。

る議員連盟（当時）会長の亀井静香さんは、職員室に直接電話をかけてくださった。こうした取り組みが先駆けとなって、本書で紹介する「LGBT」や「臓器移植」、「核兵器」などの授業後の取り組みにつながっている。この他の取り組みとして、生徒たちの感想を『山陰中央新報』の学生向け投稿欄である「ヤングこだま」欄に投稿し、掲載していただいている。時々、読者の方から反響があるのも楽しみだ。まさに「こだま」が返ってくることで、生徒たちの学びは深まるのである。

生徒にとって「切実」な教材を提供したい

アウトプット型の授業は、「教科書を教える」だけでは成り立たない。教材そのものが、生徒にとって「切実」でなければならないからである。授業は生もので、ネタである教材が新鮮でなければ、生徒たちは深く考えてはくれない。私たちの社会が「現在」抱えている課題に加え、「過去」から学べたり、「将来」を見通したりできる教材を生徒たちには提供したいと強く思うようになった。普段から情報をキャッチするアンテナを高く掲げ、資料を準備する姿勢が必要である。

授業の中では、たくさんの新聞記事を提示することになっている。生徒たちに深く考えさせるため、どんな新聞記事を提示するのかを検討することは、教材研究の醍醐味である。そのためには、新聞記事の整理が欠かせない。2017年度からは吉賀町立六日市中学校が、2019年度からは転勤した津和野町立津和野中学校が、それぞれNIE（教育に新聞を）実践校に指定されたこともあって、日々多くの新聞記事に目を通し、スクラップする。A4のコピー用紙に新聞記事を貼り、新聞社名と日付を記してクリアファイルにストックする。クリアファイルに、「日本国憲法」や「死刑制度」などのタイトルを記しておけば、いつでも取り出せる。A4よりも大きな新聞記事は、1面そのものを折ってストックしている。わかりやすいニュース解説で定評のある池上彰さんも、朝日新聞のインタビューで以下のように語っているのです。一部引用する。



Q 池上さんは新聞のスクラップを続けているそうですね。

A 中学生のとき、東京五輪があり、保健体育の先生から新聞のスクラップをする宿題が出されました。私は選手村での出来事を切り抜いてスクラップ帳に貼り

ました。さらにコメントを書き、ニュースをどう判断するかを考えました。これが初めてのスクラップ体験です。

記者になってからは、ずっと続けています。A4の紙に1つの記事を貼っています。整理は同じ形で整えるのが大事です。今は忙しくなって、取っている新聞9紙の中から気になった記事のあるページをビリビリと破って、とりあえずテーマごとにクリアファイルに突っ込みます。本当のニュース価値は後になってわかるもので、1、2か月後に取捨選択をしています。

(『朝日新聞』2016年9月7日)

映像も重要な教材である。授業の中では、ほぼ毎時間、数分程度の映像を視聴させている。こうした映像の多くは、ドキュメンタリーやニュースなどのテレビ番組を録画し、編集したものであるが、時には映画のワンシーンを視聴させることもある。DVDには映像の内容とともに、その長さが何分かを記し、「政治」や「経済」など、テーマごとにケースに収納する。映像の長さを記すことで、授業を展開する上での目安となるからである。映像そのものが生徒たちに訴える力を持っていれば話は別であるが、そうでなければ1つの映像は3分程度にとどめたい。ダラダラと視聴させることで、授業のリズムを失っていくからである。

この他にも、本を読むこと、映画を見ること、どこかに出かけることなども、資料を準備するいい機会となる。例えば、本の中にあった資料を授業の中で提示できることもあれば、本を読むことで単元構成が頭に浮かぶこともある。映画のパンフレットや出かけた時の写真が、価値のある教材になることも多い。

授業展開を工夫したい

教材の準備と並行しながら、授業の展開を考えていくことも、教材研究の1つである。生徒たちを引きつけるために、どんな導入や発問をしたらいいのかなど、検討していくことはたくさんある。例えば導入の場面、前時のふりかえりを生徒たちと言葉のキャッチボールでやりとりするのも楽しいし、インパクトのある実物教材を提示するだけでも盛り上がる。生産の集中を扱う授業、「日本でビールを生産している会社を知ってる？」という問いに、おそらく生徒たちは「アサヒ」や「麒麟」などと、すぐに反応する。間髪入れずに、磁石をつけておいた「アサヒ」や「麒麟」などのビールの空き缶を黒板に貼りつけると、「何でくつつくんですか?」、「全部先生が飲んだんですか?」などの発言があり、導入としてはインパクトが大きい。その後、寡占状態の業界について学んでいく動機づけにもなる。また、意外性のある発問を検討すること

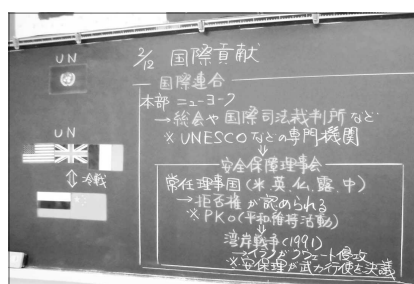
で、授業は活性化する。立憲主義を学ぶ中で、「憲法を守らないといけない人って誰？」という問いに対し、生徒たちの多くは「国民」との認識を示す。しかし、憲法99条を確認すると、憲法擁護義務のある人たちに中に、一般の「国民」は規定されていない。こうした学習活動によって、生徒たちは立憲主義について理解を深めていくのである。

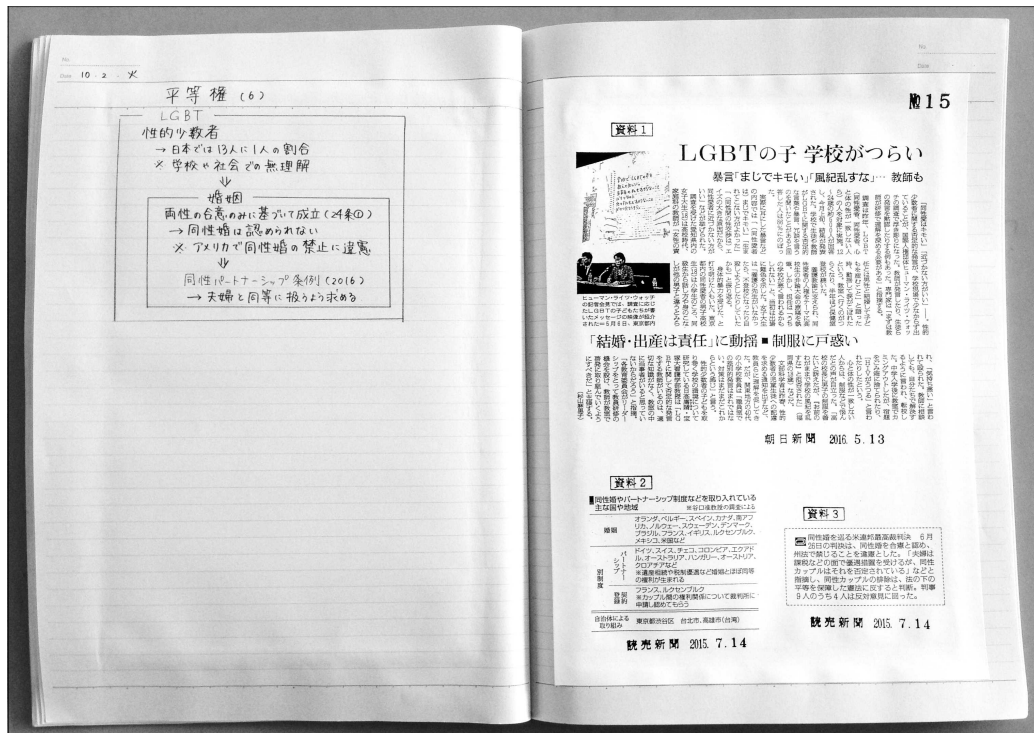
この他にも教材研究には、板書計画を立てたり、資料を準備したりと、さまざまなものがある。板書やプリント資料については後述することにして、ここでは全体に提示する資料についてまとめておきたい。写真や新聞記事などを提示する場合、実物投影機を使うと便利である。電子黒板が普及し、パワーポイントなどのプレゼンソフトを使う方も多いが、アナログ人間の私には、授業の流れによって資料の提示が自由にできる実物投影機の方が断然使いやすい。スキャナーで電子データ化した新聞記事やウィキペディアにある国旗などをプリントアウトし、ラミネートすれば、黒板に貼りつけることもできる。1時間の授業が終わった時、黒板を見ればその時間の学習内容もよくわかるはずだ。

インプット型の授業も充実させたい

アウトプットするためには、インプットすることがとても大切であることを実感している。インプットしたものがなければ、アウトプットできないし、仮にアウトプットしたとしても、その内容が希薄だからである。そういう意味においても、インプット型の授業を充実させなければならない。インプット型の授業とは、生徒が自分の考えをアウトプットする場面もあるが、一般的には1時間単位の講義型で展開する。生徒たちがインプットするためには、学習内容を理解できなければならない。その手立てとして、板書とプリント資料について、最後にまとめておきたい。基本的に板書は、日付とテーマ、学習内容について、白と蛍光オレンジのチョークのみでまとめていく。おそらく私の板書で特徴的なのは、文字を線で囲むことである。オーソドックスなのは、2重の線で囲むタイプであるが、対立関係を表すタイプもある。オリジナルで考えた板書のスタイルであるが、以前特別支援教育についての講演会を聞いた時、「文字を線で囲むと見えやすい」といった指摘があり、こうした板書が「理にかなっているのではないか」と自負している。

また、生徒たちにはA4サイズのノートを持たせていて、板書は左側のページにまとめさせている。そして右側のページには、





配布したプリント資料を貼らせている。プリント資料は、スクラップしておいた新聞記事の中から、必要に応じて選択し、作成しているものが多いが、地図や表に国名などを書き込んでいくワークシートのようなタイプのものもある。B5サイズで1枚ほど作成するのが鉄則で、ノートの見開き2ページで1時間の授業がまとめられる。通し番号も記載しており、授業の中で「ナンバー〇〇のプリント見て」などとふりかえることもできるし、ノートを提出させた際にも、プリント資料のナンバーを数えながらスムーズにチェックできる。

なお本書は、2018年度における六日市中学校での実践をベースにしているが、転勤した津和野中学校に合わせ、一部資料を津和野バージョンに改めている。概ね見開き2ページで1時間の授業を記録し、板書内容については、生徒のノートをそのままコピーさせてもらって掲載した。板書されたことだけでなく、本人がメモした内容もそのまま残すことで、実際の授業がリアルに伝わるはずである。

社会科教育に携わる方々が本書を手にとっていただき、参考にしていただければと願っている。